

綾ユネスコエコパークを活かした「みちづくり」計画について

綾町 建設課

1. はじめに

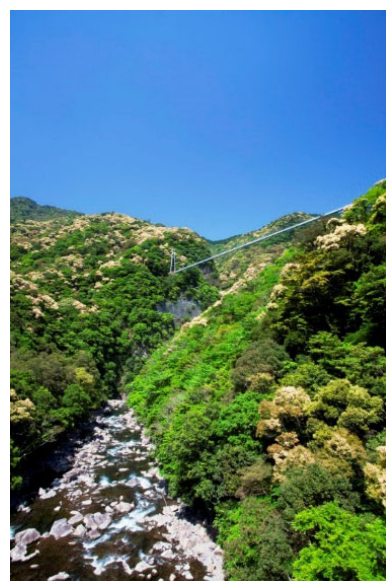
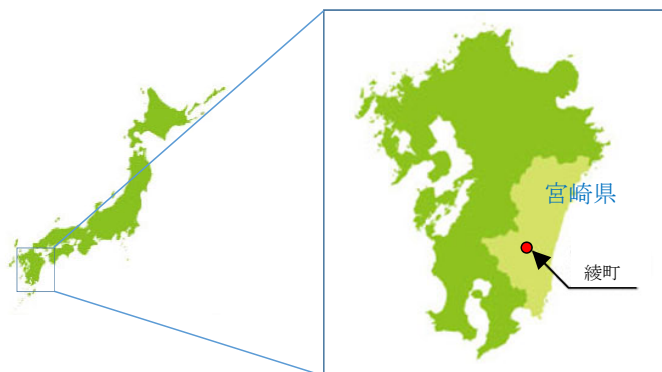
綾町は宮崎市の北西 24km の中山間地域に位置する人口約 7,300 人の町である。面積の約 80% は森林で、日本最大級の照葉樹林が広がっており、町のシンボルともいえる歩道吊橋の「綾の照葉大吊橋」（高さ 142m 長さ 250m）からその雄大な景観を一望しながら自然の美しさ、大切さを感じることができる。

主産業である農業では、全国に先駆けて制定した町独自の条例による自然生態系農業を推進しており、町内の農家の約 7 割が自然生態系農業を実践し、人参や甘藷、レタス、日向夏みかんなど多種多様な農産物を生産している。

観光面では、地域にある産業を振興することで観光に繋げることを目指した「産業観光」を展開しており特に地域の農畜産物を活用した食文化でのもてなしや雲海酒造の「酒泉の杜」などと連携した産業観光の振興を図っているほか、手づくり工芸や自然を生かした「森林セラピー」「乗馬」「水上スキー」といった体験メニューなど、さまざまな取組を進めているところである。

“ユネスコエコパークの登録”

綾町は 2012 年 7 月に、国内では 32 年ぶり 5 カ所目の「ユネスコエコパーク」に登録された。ユネスコエコパークは自然環境保全における法的保護制度と保全管理計画が整っていること、そして保護されている自然環境を利活用しながら、生活する地域住民が持続可能な経済活動・社会活動を行っていくことが求められている。日本国内では、世界遺産に登録されると観光客が増加するといわれているが、欧米やアジア諸国の中にはユネスコエコパークに登録された地域の方々より多くの観光客を集めているケースもある。このような中で綾町では豊かな生態系や生物多様性を守り、自然の恵みを受けながら文化的・経済的に持続可能な発展を目指す地域モデルとして、半世紀にわたるこれまでの町の取組をさらに充実させることを目指している。ユネスコパークという称号を地域にどのように活かしていくかは地域に暮らす人々の取組次第であると考えている。



綾の照葉大吊橋と照葉樹林



綾ユネスコエコパーク オリジナルロゴ

2. 綾町の道路事業

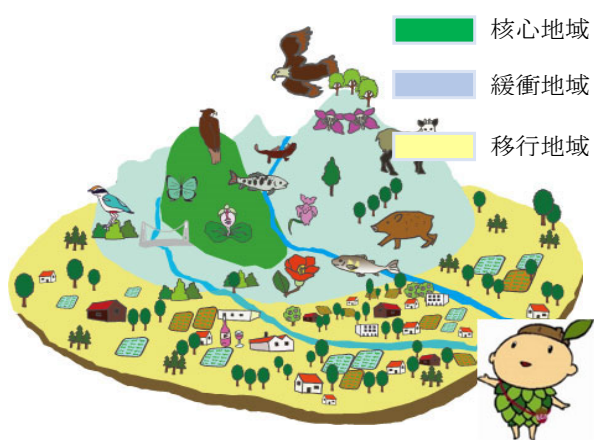
綾町内の道路については、国道は無く県道は、昭和43年に（1968年）に計画決定された都市計画道路を含め7路線、町道は自転車歩行者専用道路を含めた209路線、総延長は約192kmとなっている。舗装率は95%を超えているものの山間部集落などへのアクセス道路等は未改良区間も多く国庫補助事業等を活用し順次整備が行われている。

これまでの道路事業は道路管理者である自治体が主導的に効率性を重視しながら進められてきたが、近年の住民の生活環境に対する意識の高まりに伴い、道路に対する価値観やニーズの多様化を踏まえて、地域住民をはじめ幅広い意見を取り入れながら道路事業を展開していく事が重要と考えている。

3. ユネスコエコパークを活用したみちづくり

ユネスコエコパークは「生物多様性の保全」「学術的研究支援」「経済と社会の発展」の3つの機能がある。さらに自然生態系が厳重に保護される核心地域（コアゾーン）、環境教育や調査研究に利用される緩衝地域（バッファゾーン）、人々が自然と共生しながら持続的な暮らしを営む移行地域（トランジションゾーン）の3つのゾーン分けられている。特に移行地域での取組は自然環境を活かしながら社会活動や経済活動をどう展開していくかが鍵となり、ユネスコエコパークを活かしたまちづくりを推進するために地域住民の積極的な参加が不可欠である。このため本計画において理想のまちづくりを目指して住民参加のワークショップを行っている。

ワークショップでは、まちが大切にしているものを来訪者が感じ取り、地域住民一人ひとりが誇れるような空間づくりを目指している。また、綾町はまちなかに教育関連施設が集中していることから、地域の子供たちがまちなかで学び遊び行動することによって、まちなかを守り育てようとする精神を育み、次の世代に受け継いでほしいと思えるような環境づくりを併せて行うことが重要と考える。このような考えからもまちづくりの重要な要素であるみちづくりにおいては、道路整備の計画段階から地域住民との協働を始めている。地域住民の意見を反映したみちづくりを行うことを目的とし、併せて地域の道路づくりへの関心を持ってもらい、経済活動に効果的に結び付けるための方策について議論を深めることを狙いとしている。



ユネスコエコパーク3つのゾーン

4. 本町の特性を表現する道路景観と回遊性

前述のとおり、今回の計画ではユネスコエコパークとして、自然と共生しながら持続的に暮らしを営む「移行地域」を創出するため、地域住民と行政のワークショップにより計画を進めている。ワークショップには、対象地に店舗を構える地域住民や移住者などに参加頂くとともに、県や役場の職員も加わり、これからのまちづくりに盛り込みたい視点やアイデアなど様々な意見交換を行っている。なかで



ワークショップの様子

も現在、衰退傾向が見られる中心部が、行き交う人でにぎわいに満ちた空間になることや、「住民」と「来訪者」が共に街の魅力を感じられる都市空間にするために、まちなかに回遊性を求める声が多い。このため現況把握と空間整理によって回遊性の下地をつくり、地域資源の発掘を行い本町の特性である豊かな自然が育むうるおいのイメージを道路景観に表現することにより人を誘導する仕掛けを検討している。これと併せ、実施環境の整備として、沿道住民・事業者の合意と協力を受け、自主的な活動を促すプログラムも行っていくことも検討されている。

●頂いたご意見 このほかたくさん頂きました。全部載せられなくてごめんなさい！

- こうなりたい**
 - ・ 暮らし・自然・安心を大切にしたい。
 - ・ まちなかで長く楽しみたい。滞在時間を確保できる工夫をしたい。
 - ・ 食を楽しめるまちにしたい。
 - ・ 町民も来街者も遊べるまち、くつろげるまちにしたい。
 - ・ 親も子供もドキドキ・ワクワクできるようにしたい。
 - ・ ジャッターのお店をどうにかしたい。道と店を一体的にリニューアル？！
 - ・ 楽しい町並みをつくりたい。木を使った店で統一、照葉樹のタイル？！
- 緑・食・水**
 - ・ 飲食店、カフェテラス、ランチができる場所が欲しい。
 - ・ ほんものセンターで買った野菜を料理してくれるレストランがあったらいい。
 - ・ 水・農に触れる場所をつくりたい。(親子の水遊び、水のある道づくり)
- 安らぎ**
 - ・ 休憩所・あすまや・ベンチなど安らげる場所が欲しい。
 - ・ 子供の手作りバス停・看板、バス停に花壇・ベンチをつくったらどうか。
- 歩く空間魅力**
 - ・ まちなかに歩行者天国ゾーンをつくってはどうか。週末は屋台や物売り。
 - ・ 歩く人に店を案内する看板を設置してはどうか。小さな看板プロジェクト。
 - ・ スポーツ少年団の親子やスポーツをしない兄弟が楽しむ公園をつくっては？
 - ・ 歩きにくくなる歩道を大切にしたい。散歩道が何本も欲しい。物語りのある道。
 - ・ 細かい道は危なくて整備ができていない。管理や安全性問題もある…。
- その他**
 - ・ チャレンジショップをししたら、綾町に移住しやすくなるのでは？
 - ・ メインストリートに出店スペースを設けて、人でにぎわうようにしたい。
 - ・ 夜も歩ける道づくり。安心して散歩できる道が欲しい。
 - ・ こみの集積場所の工夫、看板の統一をしてはどうか。
 - ・ 車道と歩道は、つまづかないようにスロープにしてはどうか。
 - ・ 安全性と見通しを大切にしたい。
 - ・ 街路樹は落ち葉や毛虫が心配。

●つぶやきシートより

- ＜期待するきもち＞
- ・ この機会を町の大きな転機に！ ・ 夢や希望を叶える町づくり ・ 綾町を前へ
 - ・ 共感できるステキなアイデアがたくさんあり、将来が楽しみです
 - ・ もう一度綾町が生まれかわる希望がもてました
- ＜不安なきもち＞
- ・ 商店で販売する側、住民の住みやすさや、観光客目線ばかりにとられない町づくり
 - ・ 無電柱化にするメリットを考えてほしい。見張らしの良さ等
 - ・ ワークショップで終わらないようにしてね ・ 予算の確保、地元交渉大変だなあ
 - ・ 高工ゾーン・教育ゾーン・福祉ゾーン・農のある暮らしゾーン、イベントゾーン・観光ゾーン、住み分け

【ワークショップでゾーン分けされたメンストリート】



【道路イメージ】



現況写真

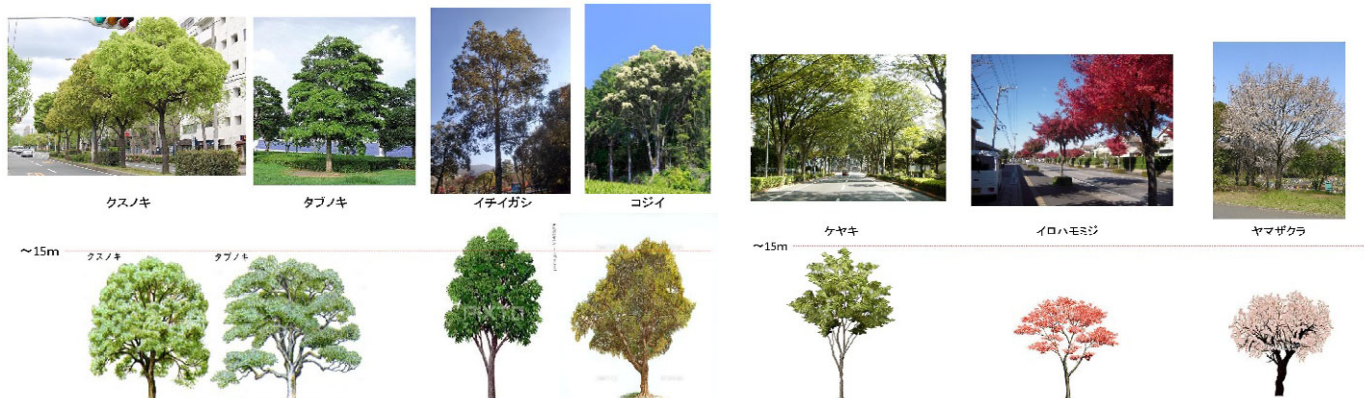


整備イメージ

【街路樹による道路景観】

“街路樹について”

道路に四季折々の景観を作り出し、樹木による緑陰を作り出す道路整備が検討されている。樹木には本町の特色である照葉樹林に生息するものを選定する計画である。



5. 街路樹などの道路管理について（問題点の改善）

歩行者が楽しさを感じるとともに、来訪者が歩きたくなるような都市の空間づくりのためには自然を活かした道路景観は有効であるが、従来の道路の高質化に見られるような効率性を重視した過度なハード整備に頼らないように努める必要があると考える。またこのような取り組みはひとつの事業では実現できるものではなく、地域住民や事業者、その他まちづくりに関連する部署による横断的な連携と継続的な取組により初めて実現するものであり、共感する人々を増やし持続的に空間が保たれなければならない。

以上の考えのもと、ワークショップでは理想論だけでなく、問題点を共有しそれをプラスに転換する改善アイデアについても議論されている。例えば沿道樹木は街や通りのイメージアップ、緑陰効果、ヒートアイランド現象の抑制などのメリットがある反面、落ち葉等による排水溝の詰り、車輦がスリップを起こ

しやすくなる懸念、鳥の糞、毛虫の発生、近隣住居への影響、維持管理費の増加などデメリットの要素も多い。しかし、この落ち葉も堆肥化するなど有効活用ができる。また、雇用創出のための循環型の管理方法を創り上げる方策の他、管理しやすい道路構造の工夫はできないかなどの意見も出されている。人口減少などの社会情勢の変化により税収が減少する中で「自然と人との共生」をテーマに魅力ある道路を創りとその管理について現在も話し合いが行われている。

●気になる事柄と改善アイデア

落ち葉をどうする？



「たい肥として利用する！」
「道路のかたちを工夫する！」
「集める方法を工夫する！」
「整備・植え方、場所を工夫する！」
「たい肥の前に遊び道具にしてみる！」

「きれいな水を流してみる！」
「水路に生態系を構築してみる！」
「畑かんの水を持ってきてみる！」
「50年かけて水に触れられる空間づくりをしたい」
「下水道の管理も将来を考えて工夫して欲しい」

水路をどうする？



滑って危ないをどうする？



「中学校の非常階段を参考に！」
「木製タイルは軟らかくて滑らない」
「色んな舗装材があるので、選べば良いのでは？」
「タイルのような切り込みがアスファルトに入っていると滑りにくい」
「透水性であれば滑らないのでは？」
「予算を投入しても滑らない工夫をして欲しい」
「滑りにくい、透水性・色褪せしないための技術を活かして良い舗装材にする」

6. 道路管理における住民参画

このような道路計画構想時点からの地域住民参画の手法は平成14年（2002年）に国土交通省もガイドラインを作成している。社会資本に対する価値観やニーズが多様化する中、地域住民にとって身近な社会資本である道路をいかに形作るか、計画をより良いものにするためには、地域の理解や協力が必要であり、住民をはじめ多様に広がる関係者との密接なコミュニケーションが重要なプロセスだとうたわれている。こうした基本認識に立つと共に今回のような構想段階からの住民参画のプロセスをモデルとし、今後本町で実施する道路事業を進めていきたいと考えている。

7. おわりに

今回のワークショップを通し、地域住民のみちづくりへの関心の高さ、期待の大きさを知ることができた。同時に行政と地域住民が一緒になって町を発展・成長させていく取組の重要性を実感した。従来道づくりは行政が計画を行い管理上の合理化により、画一的な整備が行われてきた。さらに計画に固執してしまい、実践中に気づいたアイデアにも柔軟に対応できないなどの状況があった。結果、地域の特色が感じられないどこにでもある風景を創ってきたと反省する。地域住民が参画し地域の特性を活かした事業こそ親しみや愛着をもてるみちづくりにつながり、維持管理の合意形成も図られるものだと思う。今回の計画はまだ始まったばかりの段階であるが10年後、30年後、50年後…といった時間軸でプログラムを組み立て、店舗の開業や住み替え、移住といった人の動きや植物の成長を含めたまちなか通りの具体的なイメージを考慮し、共感を大切に、地域住民とゆっくりつくりあげるものとしたい。自然の恵みを受けながら文化的・経済的に持続可能な発展を目指す地域モデルとしてユネスコエコパークを活かしたまちづくり・みちづくりを展開して行きたいと思う。